

戦争放棄平和国家は、悪との戦いも放棄するのか？

Greatchain

2017/12/03

この表題を見て、「いや、そんなことはないよ、北朝鮮とは敢然と戦うよ」と言う人があるかもしれない。これはもう少し規模の大きい話である。悪とは、単に悪行とか悪人の意味ではない。私はこのサイトで「純粹悪」という言葉をよく使っている。「絶対悪」と言ってもよい。これは靈的次元に通ずるもので、P・C・ロバーツは現米政権のあり方を、unadulterated evil（混じり物のない悪）だと言った。そうとしか表現できないということである。

プラトンのイデア論では、「善のイデア」、「美のイデア」といったものが、実在しなければならぬと言い、それぞれ「善そのもの」、「美そのもの」と言い換えている。しかし「悪のイデア=悪そのもの」は認めていない。（「汚物のイデア」なんて考えられないではないか、と言っている。）しかし、「純粹な悪=悪そのもの」というべきものは、むしろ身近な実在としてあるという認識を、我々はこの数年来、共有せざるを得なくなった。これはレディ・ガガについての私の翻訳紹介 <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170925.pdf> が、異常に高い支持を得ていることから推論できる。魂を悪魔に売り渡すということ、聖書や伝説の世界が、現実であることが明らかになってきたからである。

こんなことはつい数年前までなかったと思われる（特に宗教的な人を除いて）。私自身、こんな話は単なる比喩にすぎないと思っていた。今、イエスに起こったと全く同じことが、サタン世界のプロパガンダとして使えると見込まれた、人気歌手にも起こることがわかった。そしてサタンの目的が、2千年前と同じく、この世界を神から奪うことであることもわかった。今、宗教的次元の話——平均的な人々が縁遠いと思っている話——が、現実的レベルにまで降りてきたと言わねばならない。サタンは生きて活躍している。そのことに気づかなければ、我々は自分自身の防衛も、この地球を守ることもできない。これは大きな目覚めであり、“正しい戦闘モード”に入ることである。

「悪」と言えば、現実の悪人や悪行しか考えない人は、この話がわからないだろう。私は、聖書にある悪い麦と良い麦の譬え話、終末になると善悪の区別がますます明瞭になるといふ予言が、完全に当たっていることに驚いているが、これは時間とともにますます顕著になっていく。暴かれていく悪がさらに想像を超えたものになり、その圧倒的な醜さ、偽善、腐

臭、卑劣、恐ろしさについては、このサイトの読者は十分ご存知であろう。その特徴は、「悪そのもの」と呼ぶべきで、悪辣な手段で大儲けをしたような人間をいう「悪」とは少し違っている。特に聖職者によるペドフィリアとその開き直りには、啞然とするばかりで、これは「悪い人間」とか「悪い行為」というより、「悪そのもの」が顕現したように見える。要するにサタンというものが、そこに入ってこなければならない。少なくともローマ・カトリックの終わりは確実であろう。

我々はこのような巨悪を許すことはできない。言論によって戦わねばならない。他宗のことだ、他国のことだ、ほっておけばいい、という論理はこの時代にありえない。この悪は、One World Government、つまり世界制覇を狙う「グローバルな」陰謀団と密接につながっている。日本は圏外ということはない。新聞やテレビは、彼らの共犯者であるために、我々の直面するこの最大の問題に、我々が目覚めないように彼らは気を配っている。現在、メディアの役目は、明らかに視聴者を眠らせておくことであって、目を開かせることではない。彼らの報ずるのは表面上の、また一部であって、世界で起こっている重要な事件は、ほとんど報道されない。これは特に注意していなくてもわかることである。

こういう新聞やテレビを見ていると、我々は戦争を放棄した平和国家なので、悪と戦うこともよくないことだと言っているように見える。実際、彼らはそう言うだろう。彼らは「悪そのもの」も、悪との戦いも、抽象的で理解できないと言うだろう。武器を使わない霊的レベルの戦いなどと言えば、腹を抱えて笑い出すだろう。そういう浅い哲学に踏みとどまるように、民衆を低い知的水準にとどまらせ、犯罪者どもに対抗する力を与えないように、メディアは、CIA から操作されているのである。我々の最新情報「CIA が文字通りすべてを支配している…」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/171130.pdf> は特に重要なのでご覧いただきたい。CIA といえば、暗殺やニセ旗など、汚い仕事を思い出すが、むしろ新聞とのつながりが一番大きいようである。それは主流メディアを、つながりの筆頭にあげていることからわかる。

そこで何の躊躇もなく言えることがある。それは古今東西を通じて、CIA ほどの大規模な極悪組織、卑劣犯罪集団はないだろうということである。これが、超大国の国家機関というこけおどしの威厳をまとっているために、そう思えないだけである。彼らがこれだけの悪の組織を世界に張り巡らせ、どんな犯罪も罪にならない権威をもち、良心というものを全くもたない人々の集団だということは、何を意味するか？ 彼らがどんなに異常者でサイコパスだとしても、自分で自分に権威を与えることはできない。必ず彼らの上に**悪の神**がいなければならない。それがサタン（ルシファー）である。この神に仕え、神を喜ばせるという意識なしに、天人ともに許すことのできない極悪犯罪を、平然と行うことはできないだろう。

彼らは厚い信仰を持つ信仰者である。信仰の力なしにこんなことはできない。そしてサタンとは神に反逆し、神の座を奪おうとする霊的存在だから、彼らは無神論者などではない。ところで、我々（少なくともサタンを信じないという意味で）神を信ずる者たちは、人生うまく行かないことが多いのに、彼らサタン信仰者は、なぜうまくいくのだろうか？ 彼らも上位者ほど、富、名誉、名声、おまけに健康や長寿にまで恵まれる者が多いように見える。それは魂をサタンに売った代償と考えられる。人間のもつ最も貴重な証明書を放棄する約束をしたことへの代償である。それには、神とつながる唯一の綱というべき良心を断ち切って見せる必要があった。そしてそれには、人間の中でも最も純真無垢な4, 5歳の子供を使うのが最も有効だった。それは多くのサタン世界の出身者たちが証言している。
<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/171105.pdf> あなたは、そういう条件で得た幸福を選びますか？——「あのうちよっと、わたしは宗教の話は嫌いなので、どちらも選ばせんけど。」「いえいえ、そういうことを言っている余裕はなくなった、という話をしているのです。」